

第25回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

春の陽射し

池田 浩樹（山梨県大月市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

山上に咲くツツジの花、遠く富士山を望む絶好の日和、ツツジの花は満開、空は好天で飽くまで蒼く、この上ない好条件下の撮影となった。遠くに望む富士山の蒼い山体と白い残雪。好天候に恵まれ初夏の陽ざしを浴びて鮮やかに花ひらくヤマツツジ。この上ない条件に恵まれた一日だった。

推薦

湧雲に坐す

山下 政明（神奈川県秦野市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

富士の山体と手前の山のバランスが良く、雲との兼ね合いで富士山が高くなっている。手前の山の黒がおさえになっており、富士の気高さが余すところなく表現されている。欲を言うと、下の黒い山体がもう少しあると、さらに良くなった。なかなか綺麗な作品であり、推薦の名に恥じない。

推薦

日本の春 天野 茂雄（山梨県南都留郡） 岩殿山



白簾史朗氏講評

右の黒く太い幹を外して、左の伸び上がっている枝もカットすると、中央寄り右上から垂れ下がる枝を生かすことができる。さらに空を半分ぐらい切って縦位置の構図にすると、奥行きが深くなることで違ったものとなる。

特選

晩秋の輝き

三枝 秀雄（千葉県君津市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山の作品としては、なかなかよく撮れている。下部の黒い影の三角を少しだけ残して下を若干カットすると、陽の当たったカラマツと富士山との距離、色の違いがうまく強調されて富士山の高さが表現できる。これで富士山の山頂に新雪があるといいのだが、それは仕方がないと言わず、また新雪のときを狙えば良い。一度ではなく何度でも通うことが大事である。懲りずに……。

特選

麗しき笠雲

小林 和子（神奈川県秦野市）

お伊勢山



白簷史朗氏講評

美しい作品で特選に値する。欲を言えば、光が富士の山体に来すぎている。三蓋雲だけに光が当たり、雲と山体がくっきりと光線で分けられていると、もっと良い作品になる。持久力を持って、無駄だと思ってもねばり勝ちを狙うのが正当である。

特選

荒れる前兆 大戸 康世（山梨県大月市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

これも三蓋笠の作品で、力強さが良く出ている。こういうとき、事前に察して、初めから終わりまでしつこく狙うことだ。色なり形なりの変化があるはずで、それを追っかけて撮ることが大事だ。

入賞

染り行く山体

村上 敏幸（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

朝の感じがよく出ている好作品とあってよい。「染まり行く」では、朝か夕方かわからないので、もっと端的な画題にすると良い。朝焼けにふさわしい画題にすること。こういう場合、時間につれてどんどん変化するので、数多く撮ると良い。

入賞

朝雲流れる 大戸 康世（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

「流れる」という表現だから、もっと風が強い時を狙い雲の動きを入れることも一法である。スローシャッターで切っているのだろうが、止めたほうが色が鮮やかになる。雲の動きと形の変化でシャッタースピードを変えていくと良い。どれがチャンスか見極めて、次にどう変化していくか……。

入賞

光と影

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

山頂が画面の縦中心に近すぎるので、ほんの少し右に寄せる。できれば左の陰(かげ)のところにシュカブラのような形が欲しい。富士山はもっと小さくても良いから何か欲しい。横になびく白い筋が多いほうが良い。少し単調すぎた。

入賞

晩秋の山に雲遊ぶ 山下 政明（神奈川県秦野市） 小金沢山



白簞史朗氏講評

ちょっと全体が黒すぎたのが残念である。「雲遊ぶ」というほどの動きがない。雲の位置、形に軽やかな感じがしない。画題を考えると良かった。

入賞

曙光の詩 高橋 英子（東京都大田区） 大蔵高丸



白簀史朗氏講評

暁という感じが全くないので、せめて山頂付近に光が欲しかった。画題の「曙光」というのは、この場合ふさわしいとは言えない。富士山に光のないのが残念だった。それに構図に気をつけたい。山頂が上下左右の中心に来てしまった。

入賞

初夏を彩る 内藤 均（山梨県南アルプス市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

ワイドを使って、もう少しカメラを下げることで花のピークを中間ぐらいまで入れたい。すると花と富士の対照が生きて来る。そうすれば右の邪魔な枝も隠れる。カメラワークとはカメラが動くこと！ 花がただ入っているというのではダメで、下を少しカットして、もっと明るくすると違ったものになる。花に光が欲しい。

入賞

朝の光に 奈木 正次（山梨県大月市） 滝子山



白簾史朗氏講評

滝子山からの応募は1点しかなかった。このままでは黒いところが多すぎる。横位置にして、右 1/3 位に山頂をもってくるとバランスがよくなる。構図に気を配ることが重要である。

入賞

逆巻く雲海の彼方に 村上 敏幸（山梨県大月市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

静と動、うまく捉えたいい作品である。左を少し切るだけで素晴らしいものになる。右上の乱れた雲が気になったのだろうが、それならばもっと右を入れて富士山を左に置くと良かった。雲が主体の別の作品になっただろう。

入賞

冬の始まり 谷崎 耕史（大阪府大東市） 扇山



白簾史朗氏講評

この作品は無難にまとめられているが、このままだと下部中央の木が邪魔になる。そこで左を大きくカットして縦位置とし、富士山を真ん中に持って来る。すると、邪魔だった木が対角線に来るので、その木が逆に生きて来る。これが構図の作り方の面白さだ。そこにあるもので構図を生かすということである。

入賞

暗雲の中より 村上 敏幸（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

力強い富士の好作品である。だが、下の黒が強すぎるので、下部1／3をカットし、左1／4と右はほんの少しカットする。こうすることで、さらに強い作品に変貌するだろう。

入賞

雲間に明ける

高津 秀俊（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

この岩殿山からの富士山は、左右とも少し、それと下部も少し切って構図を整えるだけで、素晴らしい作品に生まれ変わる。

入賞

春の彩り

権正 光夫（山梨県富士吉田市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

富士山までピントが届くと良かった。花をたくさん入れたら良いというものではないので、構図を整えることが大事になる。富士山が真ん中に来ているので左をカットする。

入賞

初冬に輝く 斧田 國保（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

これは、残念なことに調子が良くない。露出にもっと気を配りたい。雲の白さと空の蒼が画然としないので、注意してほしい。

入賞

冬空に聳える

高津 秀俊（山梨県大月市）

九鬼山



白簾史朗氏講評

この作品は少しピントが甘いのが残念である。手振れにも注意することである。

入賞

厳寒の朝 三浦 明（東京都立川市） 高川山



白簾史朗氏講評

空があきすぎてバランスを崩している。左を1/4、右も少し、上下も切る必要がある。

入賞

朝光の刻 志村 孝之（神奈川県秦野市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

この作品は、左右を少しずつ、さらに上下を少しカットするだけで、見違えたものになる。左になびく雲はいいが、残念なことに山体も雲も光が足りない。

入賞

朝日に輝く 谷口 一只 (埼玉県加須市) 清八山



白簾史朗氏講評

真ん中の光っている尾根筋が生きている。これがこの作品のシンボルである。これをもっと生かすには、山体の光の当たっている部分と黒い部分のバランスを考えてみると良い。下、左、右を切ることで、左の光った斜面が大きくせりあがり、右の光った稜線が主体となって、ぐっと強い作品になる。これはさらに、もっと切って縦にしても強い作品になる。構図とは線とマッスだということを知ることだ。

総評

審査員長 白簾史朗

撮影の際、好条件に遭遇しても、そのチャンスを捉えるのはなかなか難しい。そこが、プロとアマチュアの境となる。

だが、応募者のみなさん、徐々に、物怖じせずにシャッターを押すことができるようになって来ていると思う。

つい、物怖じして、シャッターを押すときに逡巡すると、ぶれる。

「ぶれ」がなくなってきたということは、応募者のみなさん、場数を踏んできていることだと思う。

これからは、条件をどのように捉えて、その条件をどのように表現するかを念頭に撮影に臨んでいくこと。

私も、そのお手伝いをする所存である。

どうしても、アマチュアの写真家は、物怖じしてうまく表現できないが、図々しいくらいの気概を以て撮影に臨んでほしい。

とはいえ、回数を重ね、応募者のみなさん、上達していると思う。